

でんでん通信 第四百十号 平成二十九年十月

坐禅会

今月は、十月三十一日(火)午前十時より坐禅会を行います。

みなさんのご参加をお待ちしております。

秋の永代供養会

十一月三十日(木)午後二時より

法話 一宮市、耕雲院住職 服部雅昭師

みなさんのご参詣、お待ちしております。

物の豊かさとは心

幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人は「日本人は幸せだ」と書いています。

寒い冬、女性が朝早くから重い荷物を引いてやってきた。寒風で頬は真っ赤になっているのに、みんな幸せそうに笑顔を浮かべてお喋りをしている。辛いことは軽く脇にそらしてやりすごす術に長けていたのである。

もちろん日本にも貧しい人はいたが、どんな貧乏人でも人間らしい楽しみを持って生活できた。

また、みんな自分の仕事に誇りを持っていた。もちろんそこには多くの辛抱や努力、工夫があった。このことだが、根底には、人間はこの世に一時滞在することが許された旅人だという人生観があり、その意味で人間みな平等だと考えていた。

(中略)

天明寛政の頃、ある僧が江戸からの帰り木曾山中で馬に乗った。道の険しいところに来ると、馬子は馬の背の荷に肩を入れて、

「親方、危ない」

と言って助ける。あまりに度々なので僧がなぜかと問うと、馬子は

「おのれら親子四人、この馬に助けられて露の命を支えられています。馬とは思わず、親方と思いたわっています」

と答えた。この馬子は清水の湧くところまで来ると僧に十念を授けてくださいと言い、僧が快諾すると、自分の手水を使い、馬に口をすすがせ、馬のあごの下に座って共に十念を受けた。十念とは南無阿弥陀仏を十遍唱えることをいうのである。が、この男は僧を乗せるときは、いつも賃金は志としており、その代わりに僧から十念を受けて、自分ら家族と馬とが、仏と結縁する機会としていくということだった。

江戸時代の日本人はこの男に限らず、馬を家族の一員とみなしていたようである。

こういう情愛は牛、鶏から犬、猫にいたるまでに及んだようだ。

現代は気持ちにゆとりがなくなり、どこかギスギスしている。暮らし向きでは江戸期よりどれだけ快適で豊かになったか知れないのに、人々の情愛の深さはガリガリ亡者の利己主義で凝り固まった者がなんと多いことか。

逆説的に聞こえるかもしれないが、豊かで便利で寿命も延びて、より幸せになったから、人間が

駄目になったのだ。人間の命のはかなさを身近に感じていたから、見ず知らずの者にも情けをかけずにはいられたのである。

これは家族内でもいえることで、日本がもった貧しかったときは、お互い懸命に助け合って生きてきたから、家庭崩壊などとは無縁だったのである。

(清田保南老師「瑞龍」より、人生の価値より)

「これ、分かる？」

と何百万もするという高級腕時計をみせられたことがある。へー、大したもんだ、とはおじさんは思わなかった。「こいつはバカだ」と思った。高価な物を身に着けることで、己のステータス(社会的な地位)も上がると思い込んでいる人は男女ともに多い。それを誇ることで、軽蔑され薄っぺらな人間だと侮られる結果になるとは、夢にも思っていない。

《中日新聞サンデー版 おじさん図鑑より》

江戸時代から時は流れ、戦後経済成長とともに人々の暮らしは大きく変わりました。後編紹介したのは、現代日本人の様態です。江戸時代の人々が現代の日本人を見たらなんとというでしょう。これがわが子孫か……

文明の発達した現代の人々は、足るを知ること日々への感謝がどうも忘れられているように思えます。物の豊かさに伴い心を耕す必要性があるようです。